

事例 GSV 事前配布資料

1. プロフィール

- (1) 氏名：横浜 太陽（男性）
- (2) 年齢：38歳
- (3) 障害程度：軽度知的障害がい（療育手帳 B2）
発達障がい（精神保健福祉手帳 2 級）
障害支援区分 3

(4) サービス等利用計画における総合的な援助方針

グループホームに入居しているが、調理や家事なども支援があればできるようになった。そのため、本人が望む母が建ててくれたテラスハウスに戻り、サービスを利用しながらも一人暮らしの実現に向けて、余暇の充実や興味のある学習の機会など生活の幅を拡げていけるよう支援を進めていく。また、就労継続 B 型事業所にも慣れ、仕事への意欲も高まっていることから、就職に向けて就労移行事業所の利用を検討。

(5) アセスメント状況：別紙ストレングスアセスメント表参照

2. 事例の概要・背景

小・中学校は普通級に在籍。友達も少なく、学力も低かったが歴史など特定の分野の成績は良かった。いじめなどのエピソードはなく過ごしていた。中学卒業後は養護学校を進められたが、両親の強い希望もあり地方の全寮制の学校に入学する。入学当初から新しい環境になじめず、帰りたいと学校や両親に訴えていた。学校や寮でいじめ（陰口や暴力、無視、など）を受け、帰りたいとの思いが強くなり、夏休みを契機に学校に戻れなくなってしまい自主退学となる。その後は両親のついででいくつかアルバイト（老人ホーム、近所のパン屋、工場、など）をするが継続できず（老人ホームで半年が最長）自宅に引きこもりがちになってしまった。児童相談所や行政に相談し、療育手帳を取得。その後、父が急死。母が本人の生活面をすべて支援することとなり、家庭での生活が乱れてくる。（免許がないのにバイクを購入、一人でふらっと出かけてしまい 2 日～3 日帰ってこない、母に暴言を吐く、など）精神科へ通院し、発達障がいの診断をうけるが、サービスや家族以外の支援にはつながらず。唯一、中学

の時の同級生とは連絡をとり、食事などに出かけていたとのこと。

本人が30歳の時に母が認知症を発症し、本人の生活面の支援が困難になり介護保険事業所より相談を受ける。介護保険事業所とも連携しながら世帯の支援を開始するが、本人の拒否が強く会えない時期が続く。本人が近くに住む親戚とトラブルになり（ATMの利用はできるが、銀行での引き出しができず、お金を借りに行った際に手を挙げてしまい警察に2週間拘留）初めて本人と会えることとなり、その後の支援を受け入れてくれる。本人との面接や外出の機会をとり、信頼関係の構築を図っていくが、母の認知症の進行も早く、母は特養に入所し、本人はグループホームに入居することとなる。グループホームでの生活も2年がたち、成年後見も利用しながら、就労継続支援B型事業所にも慣れ、本人からも明確な希望が出てきたためPRP（注）を提案し支援を継続している。

（注）PRP（パーソナルリカバリープラン）とは、病気や障害によって希望を失っても、いまの状況を受け止め、自分らしい生き方を再発見していくための過程を示したものになります。具体的には、できることを積み重ねていくことで自己肯定感を高め、希望を実現していくための支援計画となります。

3. 就労継続支援B型事業所及びPRPでの支援経過

就労継続B型事業所では、軽作業を主に組みながら、調理のプログラムや外出のプログラムなど、余暇支援も充実しており、本人にとってはなじみやすかった。利用している間に軽作業では物足りなくなってきた、就労へ向けた意欲が高まってきている。（本人は就労のためには資格が必要だと思っており、司法書士の取得に向けた学校に行きたいと希望している）事業所では信頼できる職員もでき（今年度移動してしまった）特定の利用者とのトラブルはありつつも毎日通所できている。事業所で就労移行の情報を得て、職員と見学にも行き、就労移行事業所への移動を希望している。

PRPを通して、本人の司法書士への想いが本人にとってどのように重要なかが明らかになり、今は歴史の勉強がしたいという希望になっている。また、母が元気な時に、自宅の敷地にテラスハウスを本人名義で2棟建て、貸し出しをしており、家賃収入も生活費として賄っているが、1棟が退去することになり、自分がそこに住みたいとの希望が強くなっている。余暇の充実として奈良への旅行（2日～3日いなくなっていたのは奈良に行っていたとのこと）を希

望している。PRP を通して本人との距離も縮まり、信頼関係深まっている。また、本人が自身を振り返り、自分の想いを語ってくれる機会となった

4. サービス等利用計画の見直し

自分の気持ちや想いをうまく伝えられず、また周りで起こっていることもわからないような環境から、自分の想いや希望を伝え、周りで起こっていることも丁寧に説明をしてもらえる環境になり、本人の希望が明確になってきたので、サービス等利用計画の見直しを行った。本人の希望を実現し生活の幅を広げていくためには、フォーマルな支援（障がい福祉サービス）だけでは難しいことから、支援方法についてストレングスアセスメント票を共有し、グループスーパービジョンを行い、支援の方向性を協議した。

4. グループスーパービジョンの実施

ファシリテーターによる模擬 GSV の実施

共通事例（模擬 GSV 事例）の作成ポイント

この事例は、ストレングスモデルにおける模擬 GSV を行うにあたって作成したのになります。都道府県で研修を行うにあたり、皆様の事例を使用する場合には、模擬事例のポイントを参考にいただければと思います。この事例のポイントは、①サービス等利用計画を作成、②福祉サービスを利用、③計画の見直しと福祉サービスでは解決しないニーズへの検討（ストレングスモデルによる GSV）、④地域資源を活用しながら生活の幅が広がるという流れで作成されています。模擬事例作成の際の参考にしてください。

1. 模擬事例の流れ（要約）

本人は家族の希望で養護学校卒業に就職したが、長続きしなかった。退職後はしばらく自宅で過ごすのが、母はただ家にいるだけというのも良くないと思い、乗り気でない本人を連れて相談支援事業所に相談に訪れる。母は就労を希望するが、本人は今後の生活に対して希望を見出せずにいるため、「成功体験を積み重ね、本人が希望する生活を見つけていく」ことを目的として、就労継続 B 型事業所（以下、事業所）を利用することになった・・・(A)

事業所では、サービス等利用計画を踏まえ、「就労に向けた準備と社会性の向上」を目的として利用を開始する。徐々に事業所の生活にもなれ、一通りの作業をスムーズにこなし、友人もできるなど安定して過ごすことができていた。しかし、サービス管理責任者は本人がたまに見せる寂しげな表情や、就職の話も出るが今のままで良いと頑なに拒否するのを見て心配することがあった。また母からも週末一人で過ごすことが多いことから、養護学校時のように楽しく過ごして欲しい、やりがいを見つけて欲しいと相談がある。事業所での様子や母の話を受け、サービス管理責任者は事業所支援だけで本人の生活の幅を広げることの難しさを感じたことから、今後の支援について相談支援専門員に相談した・・・(B)

サービス管理責任者から相談を受けた相談支援専門員は、サービス等利用計画を見直し、現在の事業所利用を継続していきながらも、本人の生活の幅を広げていく必要性を感じたが、支援方法をどうするか検討するため相談支援専門員連絡会に報告する。その中で福祉サービスを利用するだけでは生活の幅を広げることが難しいことから、ストレングスモデルによる相談支援を進めていくことになった、そこで、ストレングスアセスメント票を作成し、グループスーパービジョンを行い、支援の方向性について協議（GSV）した・・・(C)

GSV を通して支援内容・支援方法（アイデア）を皆で共有し、検討しながら支援を展開していった。その結果、養護学校卒業以降、今まで行っていた卓球や友達関係が一切なくなってしまっていたことに気づき、本人のストレングスである卓球を支援に位置づけ、相談

支援専門員と見学や体験を繰り返していく中で、本人が希望して卓球クラブに入るようになった。事業所の終了後や週末は定期的に練習に参加し、大会にも出場するなど積極的に参加するようになっていった。今ではスペシャルオリンピックに参加することを夢見て練習に励み、大会の交通費を稼ぐとあって事業所の作業にも真剣に取り組んでいる・・・(D)

2. 模擬事例作成のポイント

(A) について

- ①希望を見出せない本人に対して、サービス等利用計画では、「成功体験を積み重ね、本人が希望する生活を見つけていく」が支援の目的。
- ②①を踏まえ、日中活動先として就労継続 B 型事業所を利用。

(ポイント)

サービス等利用計画での支援のポイントが書かれていること
その結果を踏まえ、何の福祉サービスを利用したのかが書かれていること

(B) について

- ①サービス等利用計画を踏まえ、「就労に向けた準備と社会性の獲得」を目的として就労継続 B 型事業所を利用開始。
- ②生活の幅を広げるため、サービス管理責任者が相談支援専門員に相談。

(ポイント)

福祉サービス事業所の利用目的が書かれていること（サービス等利用計画と連動していること）
福祉事業所での対応が難しく、福祉サービス以外の支援が必要だとわかること

(C) について

- ①サービス等利用計画を見直し、福祉サービスを利用しながらも、生活の幅を広げる支援について検討
- ②ストレングスモデルによる支援を行うに当たり、ストレングスアセスメント票、GSV を通して支援方法を検討

(ポイント)

サービス等利用計画を見直し、インフォーマル支援が必要な内容となっていること
ストレングスアセスメント票、GSV を支援の中心に置いた理由が書かれていること

(ポイント)

ここではストレングスモデルによる模擬 GSV を行う場面となります。支援方法（アイデア出し）の検討を行う（受講者は GSV を見る）*ストレングスモデルに特化する必要はありません。それぞれの地域で行っている GSV でも可。ただし、構造化されたものであること。

(D) について

- ① GSV を継続していきながら支援の工夫を行う
- ② 本人のストレングスである「卓球」（インフォーマル）を支援の中心に置き、相談支援を展開
- ③ 卓球クラブに参加、大会出場するための交通費を稼ぐため、事業所でがんばって働いている。

(ポイント)

ストレングスモデルによる支援の結果が書かれていること。

*ストレングスモデル以外でもかまいません。ただし、モデルの技法・特徴・効果については講義の中で説明が必要です)

- ④ 地域のインフォーマル資源の重要性を理解し、地域のネットワークづくりに向けて、地域課題として取り上げ、地域の工夫を引き出していく

(ポイント)

④について、相談支援専門員は地域を意識して取り組むこと、また、連携が必要であることを演習時にコメントする

その他

*地域資源とは、福祉サービスではない一般的な資源、地域の中にあるありふれた資源のことをいいます。